

2021 年度 大阪市立大学 前期 国語

第一問

問一 (解答欄 2. 0センチ×13. 9センチ)

都会の人間は、自然を意識することなく安逸に暮らし、自然の脅威に接したときのみ自然に感応するということ。

問二 (解答欄 2. 5センチ×13. 9センチ)

都市では自然と没交渉だった「雪の下の蟹」の主人公が、雪の金沢では天気之感応して生き、雪明かりに照らされた見知ったものを異質に感じるということ。

問三 (解答欄 3. 0センチ×13. 9センチ)

「雪の下の蟹」の主人公が何事にも興味を持たない状況に陥ったのは、言語的な思考偏重の生活によって身体感覚が鈍磨したことの結果であると思われるということ。

問四 (解答欄 各2. 0センチ×13. 2センチ)

(ア) 前者は詩的な標準語に置き換えられ、後者は状況や感情とともに言葉の有り様が正確に写し取られている。

(イ) 前者は地元育ちの作者が人々の交流の繊細さを、後者は転入した作者が意味より音として聞いた言葉を描いたから。

問五 (解答欄 3. 0センチ×13. 9センチ)

人間は身体感覚を通して自然や他者とつながり、影響を受けながら生きる存在であり、心身を二元化し、個人のあり方を問う思考偏重の人間理解は非現実的であるということ。

2021 年度 大阪市立大学 前期 国語

第二問

問一 ① 触 ② 払拭 ③ 際立

問二 価値(観)・選好

問三 与えられた

問四 (解答欄 1. 0センチ×13. 9センチ)

十六歳未満の女性、十八歳未満の男性の結婚。
三親等以内の血族と結婚すること。 など

問五 (解答欄 2. 5センチ×13. 9センチ)

前者は自由意志に基づく行為を選択・制御できることであり、後者は物理的因果法則に基づいて生じる身体的欲求を制御できないこと。

問六 (解答欄 2. 0センチ×13. 9センチ)

身体の物理的因果法則は、個人の経験を反映した価値や選好を間接的に形成し、行為の目的を設定するということ。

問七 (解答欄 3. 0センチ×13. 9センチ)

自由意志ではなく、物理的因果法則に縛られた身体に働きかけ、感性的刺激を与え、行為を条件づけてきた自然環境や他人格、言語や文化という広義の「他者」によって形成される。

2021 年度 大阪市立大学 前期 国語

第三問 (A)

問一 ① 並一通りでなく

② 年配の

③ 重々しい身分に

④ 供をし

⑤ 申し上げなされた

問二 ① どの天皇の御治世だとははっきりとは聞くことができておりません

② 帝は新たに琴の爪を作らせなざるすべもなかったので

③ 幼い昭宣公が、琴の爪をどうして探し出しなざることができようか、いやできないだろう

④ 幼い昭宣公が、どうして寺の建立を思いつきなされたのだろうか

問三 多くの藤原氏の先祖が眠る木幡の墓所で供養の鐘の音が聞こえないのは情けないので、思い通りの行動ができる立場になったときには、三昧堂を建てようと心に思った。

問四 仁明天皇が、まだ幼かった藤原基経に琴の爪を落としたので探して来いということ。

問五 この子の幼い目でどうして堂を建てるのに適切な場所であると見抜いたのだろうか。

問六 (ア) まだ幼かった藤原基経が、仁明天皇から紛失した琴の爪を探すように命じられたものの探しあぐねていたとき、この琴の爪が見つかったところに寺を建立しようと願を掛けて探した

ところ、琴の爪が見つかったということ。

(イ) 極楽寺

問七 「べき」は当然の助動詞「べし」の連体形であり、「前世からの因縁で当然そうなるはずの宿命の」という意味で用いられている。

2021 年度 大阪市立大学 前期 国語

第三問 (B)

問一 魏の明帝は自分の護衛官を派遣して許允を逮捕させた。

問二 官職にふさわしい能力を有していると許允が熟知している人物を任用しているということ。

問三 若し職に称はずんば、臣其の罪を受けん(と)
(ざれば)

問四 取り調べた結果、許允の任用した者たちがすべて官職にふさわしい人物であると判明したから。

問五 明帝は優れた君主なので、感情によって理解を乞わずに道理によって説得すれば、許允は許されて無事に帰宅できると信じていたから。